福井県立美術館 2016

美術館だより

MUSEUM NEWS Vol.148

contents

〈展覧会紹介〉
「シャガール展」ー高知県立美術館コレクションによるー [2〜3]
ブブ広報部隊の勝手にイベント報告 [3]
〈イベント報告〉「大永平寺展」 [4〜5]
〈イベント報告〉「戦後 福井の美術 ー前衛に生きた人々ー」 [4〜5]
〈展覧会紹介〉「福井の彫刻・立体 ー尾澤正毅の世界ー」 [6]
米谷清和氏に聞く
「日本画家・横山操とその時代(最終回)」 [6〜7]
福井県立友の会「平成 27 年度 秋の見学会」 [8]
ブブ広報部隊の一年の変遷を振り返る [8]
それゆけ!ブブ広報部隊 [8]
〈お知らせ〉募集・休館日・貸館情報 [8]

表 紙：尾澤正毅「女 83-1」(部分) 1983 年 個人蔵

ふるさと知事ネットワークによる美術館交流事業

シャガール展

愛と神話、聖書の物語

高知県立美術館コレクションによる

平成28年2月19日（金）－3月21日（月）休館日なし

午前9時～午後5時（入館は閉館30分前まで）

版画集

『アラビアン・ナイトからの四つの物語』
『ダフニスとクロエ』
『オデュッセイア』
『聖書』を中心に

観覧料／一般・大学生200円
※20名以上の団体は2割引
※高校生以下、70歳以上、障害者手帳提示者および介護者1名は無料

主催・会場／福井県立美術館
協　　力／高知県立美術館

関連イベント
◎学芸員によるギャラリートーク
毎土曜日　午前11時～当館展示室にて
※本展観覧券が必要です。
◎コンサート「シャガールと音楽」
2月27日（土）午後2時から当館にて ※無料

マルク・シャガール「花嫁の花束」油彩　1934-46　高知県県立美術館蔵
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016, Chagall® G0151

マルク・シャガール（1887-1985）は20世紀を代表する作家で、恋人たちや動物が空を飛ぶ幻想的な作風は日本でも広く知られています。ヴェネツィア・ビエンナーレの版画部門でグランプリを受賞するなど版画の名手としても知られ、版画による挿画本（作家オリジナルの版画を入れた限定本）で多くの傑作を残しました。

本展では、高知県立美術館所蔵のシャガールに関する豊富なコレクションの中から、版画による挿画本『聖書』、『アラビアン・ナイトからの四つの物語』、『ダフニスとクロエ』、『オデュッセイア』に収録された名品を中心に、人間の様々なドラマを詩情豊かに表現した世界を紹介します。また、当館所蔵のピカソやルオー、ミロなど、同時代に生きた作家たちの版画も併せてご紹介します。

自立と分散で日本を変えるふるさと知事ネットワーク

地勢の異なる地方の13県（青森、山形、石川、福井、山梨、長野、三重、奈良、鳥取、島根、高知、熊本、宮崎）が、新しいふるさとの創造に向けて「ローカル・アンド・ローカル」の発想の下、人や地域の新しいネットワークをつくり、地方自治の新しいモデルをつくるための活動を行っています。

美術館喫茶室ニホではシャガール展期間限定特別メニューをご用意しています

Contact
美術館喫茶室 ニホ
open：9時～19時
closed：月曜日
tel：0776-43-0310　＊無料 Wi-Fi＊
address：
〒910-0017 福井市文京３丁目16-1
福井県立美術館　正面左手
※美術館が休館でも、月曜日以外は営業しております。

ブブ広報部隊の勝手にイベント報告

ブブ
広報部長

ポール
広報部員

ミニブブ
広報部員

レンブラント展

◎講演会

10月3日（土）　午後2時から
講師：レオノーレ・バン・スローテン（レンブラントハウス美術館）、
　　石川浩（福井県和紙工業協同組合）
参加者：60人

講演会会場風景

好奇心旺盛なレンブラントが版画に使った世界中の紙のなかには中国や日本など東洋の紙があります。使われた和紙は越前和紙ではないかということが近年調査されていましたが、この講演会では長崎を通じて出荷された和紙の土地ごとの簾の目の幅から越前和紙であろうという確立を高めた内容となりました。

◎マッキー先生の「レンブラントに挑戦」越前和紙によるドライポイント版画体験講座

10月18日（日）、25日（日）　午後1時～午後4時
講師：牧井正人（県庁文化振興課）
参加費無料　参加者：60人

版画体験講座風景

小学生以上を対象としたこちらの講座は腐食などの行程がないドライポイント。手軽な上に、仕上がるまでのワクワク感が大きいためか、あまたの老若男女が真剣に制作する姿が見られました。

◎子どもワークショップ「越前和紙による銅版画の刷りを体験しよう」

10月24日（土）　午後12時半～4時
講師：三井田盛一郎（東京藝術大学）
参加者：12人

高校生に指導する三井田先生

高校生対象の本格エッチング講座の会場を覗くと醤油が1瓶。何でも醤油は銅版の酸化止めという秘めた能力があるらしく（酢と何かを混ぜるのでもオッケーらしい）、これは東京藝大の秘法という訳ではなくよくある手法だそう。いよいよプレス機で刷って形が見えてくると、高校生達の顔はさすがにうれしそう。手を真っ黒にしてインクを塗り、手伝ってくださった三井田盛一郎先生、藝大生の皆さんに感謝。高校生にとって、本当にかけがえのない体験になりました。

テーマ展

◎ふれあい文化子どもスクール

主催：県庁文化振興課
12月3日（木）参加者：午前232人、午後417人
12月4日（金）参加者：午前182人、午後338人

ふれあい文化子どもスクール開催中

福井県では、毎年県内の小学校5年生に音楽堂でコンサートを体験させ、県内の文化施設を見学させるという体験学習が行なわれています。当館ではテーマ展「戦後　福井の美術」と、菱田春草の《落葉》（12月3日から13日までの特別展示）の鑑賞を行い、大人数を捌くため分刻みのスケジュールで3カ所に分かれて解説を行いました。

◎新春落語会

1月9日（土）　午後2時～3時
演目：悠月亭千々「千早ふる」、瓢屋萬月「権助提灯」、
　　月見亭だんご「子ほめ」、葵亭真月「幾代餅」
参加者：140人

満員御礼の落語会会場

テーマ展「いきな時代の男と女」にあわせて、県内を中心に活躍する落語月の会のメンバーによる新春落語会が開催されました。

その他

横浜そごう美術館　日本画の革新者たち展　「福井県立美術館所蔵　特別出品菱田春草《落葉》」

1月16日（土）～2月16日（火）
入場者：約34,000人

そごう美術館でのギャラリートーク

そごう美術館の日本各地の美術館の名品を紹介するシリーズの第一弾として、当館のコレクションが紹介されました。初日の1月16日には当館の学芸員によるオープニングギャラリートークを開催。菱田春草《落葉》や岩佐又兵衛の作品が人気だそうで、展示ケースやスペースの問題で当館でもめったに出来ない夢のラインナップとなりました。

《イベント報告》

大永平寺展

禅の至宝、今ここに

平成27年10月2日[金]―11月8日[日]

主催：福井県立美術館　特別協力：大本山永平寺
共催：福井新聞社、FBC福井放送、福井テレビ
後援：福井県教育委員会、永平寺町、(一社)福井県文化協議会

※同時開催「レンブラントハウス所蔵　レンブラント版画名品展」

県立美術館では10月2日(金)から11月8日(日)まで、曹洞宗の開祖道元禅師(1200～53)ゆかりの品々や、永平寺に伝わる貴重な文化財を紹介する展覧会を開催しました。本展では、大本山永平寺の特別協力の下、国宝2点、重要文化財3点に、初公開を含む102点を展示し、道元禅師と永平寺の歩み、そして永平寺に伝わる美を展観しました。伽藍神をはじめとする彫刻群や、4メートルを超す巨大な掛軸、20面を超える襖など大掛かりな展示も多く、迫力のある展示になりました。会場には、ドローンで撮影した映像や、四季折々の永平寺境内を写したパネル、あるいは永平寺の天井画の複製などが並び、永平寺について多角的に焦点をあてることを試みました。

開会式

《イベント報告》

戦後　福井の美術

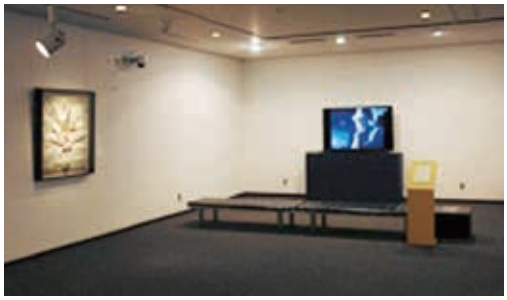
テーマ展

―前衛に生きた人々―

平成27年12月 5日(土)
～ 平成28年 1月17日(日)

主催　福井県立美術館

展示風景


映像コーナー

県立美術館では平成27年12月5日(土)から平成28年1月17日(日)まで、「戦後　福井の美術　―前衛に生きた人々―」展を開催しました。

本展では、私費による美術館の建設や、新進気鋭の中央の作家を招いた講習会の実施等により、既成概念を打ち破る独自の表現が次々と花開いていった戦後の福井画壇の歩みをひろく紹介しました。また、NHKと連携し、「日曜美術館」放送40年記念キャンペーン「みつけよう、美」の一環として、小野忠弘の作品「アッサンブラージュ」等を展示し、1986年に「日曜美術館『アトリエ訪問　画家　小野忠弘』」で放送された貴重な映像とともにご鑑賞いただきました。

本展関連企画「座談会Vol.1『戦後　福井の美術1945～』」、「座談会Vol.2『戦後　福井の美術1960年代～』」等、戦後の福井画壇を検証する多彩なイベントも行われ、多くの方々にご来場いただくとともに、新聞、テレビ、ラジオ等のメディアで大きく扱われ、沢山の反響をいただきました。

ご来場いただいた皆様にこの場を借りて、お礼申し上げます。

また美術館の新しい試みの一つとして、「触れて感じる」をテーマに坐禅や禅文化を体験できるコーナーを設置しました。永平寺で実際に使用されている単（坐禅するための台）や坐蒲を借用し、それらを用いて多くの方に坐禅を実践していただきました。また推定500キロを超す梆（魚型の法器）も併せて展示し、坐禅する空間の再現に努めました。応量器（禅宗の修行僧が使用する入れ子状の食器）を手に取って体感できるように配置し、精進料理を紹介する映像も会場で放映しました。

さらに越前和紙との関わりから「レンブラントハウス所蔵　レンブラント版画名品展」が同時開催され、東西の素晴らしい美術を一度に観賞できる貴重な機会となりました。

第1会場

第3会場

関連イベント

◎坐禅体験コーナー ＆ DVD上映
会期中随時

坐禅体験コーナー

◎見どころ解説会
会期中の土曜、日曜、祝日
午前11時から ※10月3日、17日、31日以外
参加者：4,282人（坐禅、見どころ合計）

◎学芸員によるギャラリートーク
10月3日（土）、31日（土）
各午前11時から
参加者：60人

◎トークサロン
10/23日（土）、31日（土）
午後6時から
参加者：19人

◎座談会 Vol. 1 「戦後　福井の美術1945～」

12 月 13 日（日）　午後2時～
登壇者：高橋昇（画家）、小原勉（画家）、荒木道之（画家）、
西村直樹（福井県立美術館）
参加者：約 75 人

この座談会は、地方都市・福井で盛り上がりをみせた当時の美術運動や画壇の状況等について、「戦後福井の美術」の渦中にあった方々にお越しいただき、直接話をうかがう貴重な機会となりました。

時に身振りを交え、時に異論を唱え、時に高揚し、戦後の福井の画壇という熱い時代を生きた、本当に熱い男たちの座談会。予定時間の倍近い約２時間の間、75人の来場者は1人も席を立つことなく、終了後も熱心に学芸員に話しかけるほど盛況でした。広報部員ポールはこの日、西村学芸員の身体を借りて、長丁場にならないよう長老たちの話をバシバシぶった切っていました。

左から、高橋昇、小原勉、荒木道之、西村直樹

◎座談会 Vol.2 「戦後　福井の美術1960年代～」

1月 10 日（日）　午後 2 時～
登壇者：水谷内健次（写真家）、赤土善蔵（建築家、元ギャラリー主宰者）、
黒原繁夫（小コレクター）、西村直樹（福井県立美術館）
参加者：約 50 人

1960年代から80年代にかけて福井で画廊を主宰、もしくは作家と深く交流を持った方々にうかがう当時の福井のアートシーン。約２時間の間、約50人の来場者達は福井のアートの現場を知る方々の話に熱心に耳を傾けていました。

当時の画像や小野忠弘が監督した超貴重な８ミリ映画に登場する、若かりし日の眼光鋭いギラギラした登壇者の姿に、「ちょいワル親父たちの若かりし頃は本ワルだったんだ」と感じたこの日のポール…。この日も西村学芸員の身体を借りて、もと本ワル、今ちょいワルな親父たちを仕切っていました。

左から、水谷内健次、赤土善蔵、黒原繁夫、西村直樹

制作中の尾澤正毅　1997年

テーマ展「福井の彫刻・立体 －尾澤正毅の世界－」

平成28年 2月19日（金）～3月21日（月）

福井大学で24年間にわたり彫刻を指導した尾澤正毅（おざわ・まさき 1936～2010）が亡くなり今年で6年になります。

尾澤は生前福井大学の他に広島市立大学や愛知県立芸術大学でも教鞭を執り、1996年から2002年まで当館主催の実技講座専門彫刻の講師を務めました。2002年3月の福井大学退官後もたびたび福井を訪れ、最後まで後進の指導に尽力し、「市美展ふくい」や「福井市彫刻のある街づくり」の運営や審査を行うとともに、福井の美術教育についても研究、調査し、論文等を発表しました。またモニュメント作品が福井大学附属小学校や鯖江市東陽中学校に常設されています。

本展では尾澤が常に「彫刻とは何か」と問いかけながら「線」と「奥行き」にこだわって制作した作品群を一堂に紹介します。また本県ゆかりの物故彫刻作家である雨田光平（あまだ・こうへい 1893～1985）、高田博厚（たかた・ひろあつ 1900～1987）、内藤堯雄（ないとう・たかお 1925～1993）や、現在県内で活動する池田雅彦（いけだ・まさひこ 1957～）の作品も併せて展示し、「福井の彫刻・立体」の一断面を紹介します。

関連企画

座談会「彫刻とは何か？ ～尾澤正毅が問い続けた仕事～」

月日／**平成28年3月6日（日） 午後2時～**
場所／**福井県立美術館講堂**

登壇者／**横澤英一**（彫刻家）
水谷たき（愛知県立芸術大学名誉教授）
余座正之（尾澤正毅遺作展副実行委員長）

尾澤正毅「胸像ＳＦ－８４」 1984年

INTERVIEW

米谷清和氏に聞く 日本画家・横山操とその時代（最終回）

横山操
1920年新潟県西蒲原郡吉田村（現燕市）生まれ。昭和を代表する日本画家。洋画家をめざして上京し、1940年青龍社展で入選。その後徴兵されシベリア抑留に遭い1950年に帰国。同年に初の個展で「網」「川」等を出品、「炎炎桜島」で青龍賞を受賞。1962年に青龍社を脱退。1966年に多摩美術大学日本画科教授に就任、熱血指導で学生に慕われ、多くの日本画家を育てた。1971年に脳卒中で倒れ右半身不随となり左手で制作、1973年に制作途中に亡くなった。

米谷清和
1947年福井市生まれ。1972年第4回日展に「エレベータ」が初入選。1973年多摩美術大学大学院修了（修了制作「エレベータ」）。1985年山種美術館賞展優秀賞。2002年福井県立美術館にて「米谷清和展」開催。現在、日展評議員、多摩美術大学教授。

聞き手　佐々木美帆（福井県立美術館学芸員）

1. 横山操、箔を手裏剣貼り！？

―横山操さんが「網」「川」を描いていた頃について、引き続き教えて下さい。

谷中でまだ会社勤めしていた頃だからアトリエは谷中です。谷中のネオン屋の社長が気に入ってくれて、会社のワンフロアを提供されてそこで描かれていたんです。そうでないとこんな大きな絵を描けないです。今は様子が違うけれど、その頃の谷中は東京のはずれじゃないですか。

デザイン的センスもあって、僕は横山先生が直してくださった犬吠埼を描いた小さい絵があるんですけど、デザインやっていたから溝引きのスピードたるやすごいもので、灯台の金網を直すのにあれだけの線を2～3分で全部描いてしまわれた。僕なんか未だに出来ないけど、やってくださいましたね。

―横山さんが箔を貼るときは手裏剣のように貼ると伺いました。

目の前でやってくださったんです。普通は箔を貼るのに箔1枚分の大きさだけ膠を塗っていくでしょ。それを「画面に全部膠塗れ」って言って、50号全部貼っていかれましたよ。箔の束を掌に載せて、箔をピヨッと1枚分、指で取るんですよ。それで箔の間のあかし紙を1枚外して次の箔を（箔の束から）ずらして画面に貼るんです。だから、50号位なら膠が乾くまでに貼れちゃうんですね。学生の前で実演されました。

―出来る学生いないですよね？

いや、他の人も出来ませんよ。あれだけ箔を使っていたから出来たんだと思います。

―私が美大生のときは箔箸を使って1枚ずつタラタラと時間をかけて貼ったんですが、、、、。

僕らもそうやって箔屋さんには習いました。これは伝説でも何でもなくて、あの時10人ぐらいの学生の目の前でされました。本当に図ったように1枚ずつ、（箔の束から）ずれるんですよ。あかし紙をこうして棄てるでしょ、でまたシュッ、シュッと、手がずれるだけで。びっくりしましたね。

―繊細な作業ですよね。

かなり指先が敏感でないと出来ない仕事です。

―それでこんなに大きな大胆な絵を描いちゃうんですね。

2.「越後十景」制作秘話

「越路十景」（1968年発表）の中に「越前雨晴」があるでしょう。横山先生と僕と旅行で福井に来たんですよ。名古屋で展覧会を見て、河原進さん（1958年青龍社展初入選、以後解散まで毎年出品。川端龍子、横山操に師事）が個展をやっているっていうんで京都から福井に来たんです。大岡薬局か桃太郎か化粧品屋の人の案内で越前岬の海を見て、あの日は芦原の開花亭に泊まったのかな。東京に帰って10日程経ったら、「来い」って電話が掛かってきたから行くと「越前雨晴」が出来ていたんです。

—10 日ですか。どれだけ手が早いんでしょうね。

いやいや、電話が掛かって来たのが 10 日ぐらいだから、実際は 10 日も掛かっていないです。初めは「越後八景」（佐渡秋月、蒲原落雁、間瀬夕照、弥彦晴嵐、出雲崎晩鐘、上越暮雪、能生帰帆、親不知夜雨）だったのを、福井の「越前雨晴」を入れるために立山（立山黎明）を入れて「越路十景」にされたんです。福井の越前岬でスケッチブックも出さず、何もしないで見ていただけでした。それで 10 日後に「どうだ、越前海岸だ」って出て来たという話で、僕も一緒に座って見ていたので印象が残っているけど「あのままですね」っていう感じ。京都で時代祭を見てその帰りに寄っているから、10 月末の海で低くて暗いんですよ。「越前雨晴」はそんな感じですよね。

横山操《越路十景》のうち「越前雨晴」
1968(昭和43)年　紙本・墨画彩色　山種美術館

横山操《越路十景》のうち「立山黎明」
1968(昭和43)年　紙本・墨画彩色　山種美術館

—横山操さんは日本海側生まれだから、日本海の灰色の暗い感じは身に染みてご存知なんですよね。

そうですね。横山先生が最初に倒れたとき、先生に黙って生家を訪ねたんですよ。お母さんが先生といとこ同士だったか草野さんという親戚の人がいて、その人の娘さんに連れられて横山先生の生家と、間瀬に行きました。「越路十景」のなかの「間瀬夕輝」は何でかというと、間瀬の草野家の横に横山家の別荘があったからという由緒です。だけど間瀬ってあんな風景じゃ全然ないですよね。だけど、先生が小さい頃そこに遊びにいらしていたからっていうことで、きっと入れたのでしょう。

出雲崎の良寛堂（出雲崎晩鐘）が描いてあるのは、お父さんが新潟で良寛の書のコレクターだったということもあって入れられたんじゃないかと個人的には思っています。

生い立ちからくる横山先生の精神的な思いはすごく分かります。だけど横山操の同級生っていう人にお会いして、暮らしを聞くと客観的なずれってありますよね。小学校5年生のときに新潟の吉田っていう片田舎にいて、大正生まれの人が油絵の具を使えるっていうこと自体が客観的に見たらすごいでしょう。僕らでも高校になってようやく手にした油絵であって、普通の子だったら手にしていない。そういう生い立ちで、尋常高等小学校学校の卒業式に羽織袴で来たのは横山先生だけだった。（同級生の人に）「家に写真ありませんか」って聞いたんだけど、「今は見つかんないなあ」って言って。だからそういうお家に育っているんです。良寛の書を集めているお父さんがいて、小さい時から文化程度が高いお家にいたんだと思いますね。

横山操《越路十景》のうち「間瀬夕照」
1968(昭和43)年　紙本・墨画彩色　山種美術館

横山操《越路十景》のうち「出雲崎晩鐘」
1968(昭和43)年　紙本・墨画彩色　山種美術館

3. シベリア抑留時代

—尋常小学校を卒業して画家を目指して上京したものの、途中で召集されましたね。

ちょうど 20 歳で行って、シベリア（カザフ共和国）の捕虜収容所に抑留されて石炭採掘に従事して帰って来られたのが 30 歳ですから、10 年間です。

—その時の話を聞いてらっしゃいますか。

一番面白かった話は『藝術新潮』に「横山操の再起」っていうのが載った頃、広島のお医者さんから来たという手紙を読ませてくれました。そのお医者さんは戦争時代、横山先生と同じところで捕虜だったらしいのです。

横山操って、抑留先で重労働だって話を聞きませんか？当時の雑誌だと「俺は沢山の飯を食いたいから重労働の方へ行った」って、書いてあります。ところが、その捕虜時代に一緒だった人の手紙には「捕虜の待遇改善の為に先頭に立ってデモっていた君を思い出します」ってあるんですよ。そんなことをやるから重労働にまわされているんだけど、それを一切おっしゃらなかった。

僕らの頃には学園紛争があって、僕らがやっていると先生は「やめろやめろ」とおっしゃっていました。でも、その手紙を見ると、僕らにはいろんなことを言っていたくせに、自分も捕虜になってまで、捕虜の待遇改善のために先頭に立ってデモってた。自分もやっているんじゃないですかって感じ。

その手紙でもう一つ面白かったのは、捕虜の文化祭とかそんな時に横山先生が描かれた絵のことでした。「黒いボタ山に寄り添う若い二人。真っ赤な夕焼けに真っ黒なボタ山の上に寄り添う二人。君の絵を思い出します。」

何か思い入れがあるのか分かんないですけど、横山先生が最初に描かれたカザフスタンの風景（「カラガンダの印象」1950 年）ってボタ山でしょ。

4. 横山操への思い

ちょうど亡くなられた時に色々調べたんです。横山操がお姉さんと慕っていた人はもうおばあさんでしたけど、そのときお会いして、横山先生が吉田町で育った家と、寝起きした部屋も見せて頂きました。そしたら中庭に面した所に立派な螺鈿の机があるんですよ。その真ん中に一本傷がついているんですが、「これ、操さんが東京行くときに傷つけていった傷」っておっしゃっていた。

色々な人が横山操を調べているけれどもその人たちが調べていない横山操を僕はそのときに勝手に廻って歩いて、記録はしていないけど記憶の中で残っているものは結構あります。

何となく思うのは人の言葉って一面でしかないでしょう。それが全面のように伝わってしまうことがちょっと淋しいなと思う事がちょっとあります。きっとそういうことの裏もあるんでしょうけど。ただ、したり顔で調べたみたいな声の大きい人だけが真実になってしまうと危ういなとは思います。

インタビュー編集後記　真剣勝負の時代

写真や作品を見るだけで横山操という作家からはみなぎるような力を感じるが、今回 3 回に渡る愛弟子・米谷清和氏の連載によって、さらにその魅力やスケールの大きさを知ることが出来た。

師横山の激烈な指導や、米谷氏の若き日の生意気、作品を命がけで作っている者同士の言葉、などなど聞き所満載であった。

当館では 1980 年に「回顧展　横山操」展を開催し、横山操の畏友・加山又造を招いて記念講演会「横山操と私」を行った。そこで、加山は横山との最初の出会いについて語った。個展に訪れた横山が加山の作品をけなし、睨み合いになったところをある人が仲直りの一席を設けてくれ、そこで十年の知己のように仲良くなったというものだった。

批判された加山が、横山と十年の知己となったのは、根本にはお互いに作品制作に魂をぶつけるという共通点があったからで、生半可な者が技量もないのに言ったのであれば観客席からの野次に過ぎなかっただろう。両者が互いに日本画に打ち込んできた者であったからこそ、良き好敵手となったのだ。

今回のインタビューでは率直な発言に、肝を冷やしつつ聞く場面もあったが、横山はシベリア抑留中にデモの急先鋒となり、米谷氏はその弟子なのだから、こちらも回りくどい表現なしでそのまま雰囲気を味わって頂きたく、原文を生かしつつ適時編集した。真剣勝負の時代の空気を感じつつ読んで頂けたなら幸いである。

佐々木美帆

福井県立美術館
友の会

〈平成27年度　秋の見学会〉

日　時 ◎平成27年11月26日（木）～11月27日（金）　参加人数 ◎36人
行き先 ◎東京都美術館「マルモッタン・モネ美術館所蔵 モネ展」
Bunkamuraザ・ミュージアム「風景画の誕生」
三菱一号館美術館「プラド美術館展―スペイン宮廷 美への情熱」

東京で話題の展覧会を一通り巡った今回の見学会。自由時間には「黄金伝説展」（国立西洋美術館）、「肉筆浮世絵－美の競艶」（上野の森美術館）、あるいは夜間開館の時間を狙って「村上隆の五百羅漢図展」（森美術館）をご覧になったツワモノも。宿泊したホテルニューオータニでは、鉄板焼きに舌鼓を打ち英気を養いました。

ホテルニューオータニの夕食

帰りの東海道新幹線で思いがけず富士山の雄姿を車窓から望み、浮足立つ車内。

ブブ広報部隊の一年の変遷を振り返る

ブブ広報部隊は学芸員室を常宿とし、当館Facebookでの広報を担っている。この1年、彼等は季節や展覧会ごとにイメージを変え、体を張って宣伝をしてくれた。また正月にはお年玉企画としてかれらの年賀状が来場者に配布された。今後ともさらなる活躍が期待されるところである。なお、イラストは事務所のM氏がワードを駆使して作成しているらしい。

ブブ広報部長・・・部隊の代表でインテリなブタを目指している。読書家ゆえに「それゆけ！ブブ広報部隊」は部長の読書日記と化している。
ポール広報部員・・・助手でカエル。たまにオヤジ的コメントが入るのは、学芸Nのつぶやきをひろうからららしい。
ミニブブ広報部員・・・助手でブタ。箱入り息子で、部隊中唯一の個室持ち。夜は専用ベットで寝ている。連れて歩くのにちょうどよいサイズであるため、学芸Sの出張に同行することが多い。

絵・文　ささきみほ

※インシャラーとはイスラム教徒がよく使う感動詞的な言葉

お知らせ

平成28年度 実技講座受講生の募集

福井県立美術館では「日本画」「洋画」「素描（デッサン）・水彩画」の基礎講座（4～6月・10回）、専門講座（7月～翌年2月・25回）の受講生を募集します。

～ 詳細は2月以降に当館に備えてある募集要項やホームページをご覧ください ～

日本画、洋画講座
／定員各15名
素描（デッサン）・水彩画講座
／定員30名

平成28年度 会員募集のお知らせ

福井県立美術館
友の会

詳しくは、事務局（TEL.0776-25-0452）までお問い合わせください。

年会費	一般会員 2,000円／家族会員 4,000円／特別会員 10,000円
特典	①展覧会　●企画展無料入場券配布（一般会員1枚、家族会員3枚、特別会員8枚） ●美術館主催・共催展2割引　●テーマ展無料　●企画展鑑賞会（定員20名） ②友の会ニュース（随時）、美術館だより（年3回）送付 ③ミュージアムグッズ2割引（常設展のみ） ④実技講座、美術館見学会（年2回）への参加［実費負担］
申し込み	3月1日以降

◎2016年3月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。
3月22日（火）、23日（水）、28日（月）～31日（木）

貸館情報　[3/3-3/27]

3/3～6	爽和会日本画展	3/16～20	第2回ふくい創作美術会展	3/24～27	第22回玲風会日本画展
3/9～13	第18回グループ「青い扉」パステル画展	3/16～20	花・鳥・風・月ー坂井敏之展	3/25～27	第35回鳳友会展
3/9～13	福井大学教育地域科学部美術教育サブコース卒業・修了制作展	3/17～21	2016福井一陽展	3/25～27	第12回藤島高校書道部展

本誌は再生紙を使用しています。
編集／発行：福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京3丁目16-1　tel.0776-25-0452　印刷：小川印刷株式会社　発行日：平成28年3月8日　16.03.20220